

## 特別研修

# 月例研究会 議事録 ( 9 月 )

2008 年度第 3 回

<b>報告題名</b> 地域エネルギーの持続可能性の調査研究	
<b>報告者</b> 松井 克 則	<b>日時</b> 15:00-17:00
<b>(所属分野)</b> 地域計画学	<b>場所</b> 第7講義室
<b>座長</b> 池田敦	<b>議事録担当者</b> 飯塚聖司
<b>出席者</b> 米倉、川村、大鎌、石井、両角、長谷部、木谷、伊藤、佐藤章夫、澁谷、鹿嶋、福田竜一、小山田、佐藤文吉、池田、高嶋、田口、松井、村松、ソ、八木、柳瀬、神浦、佐々木、野村、水木	
<b>報告要旨</b> <p>最近の地球温暖化のひとつに、環境問題がありまる。家庭生活や産業を支えるエネルギーは、化石燃料が中心で資源の枯渇はもとより、温暖化の要因ではないかとされる、二酸化炭素などの温室効果ガスの排出を増やし続けることとなっている。地球環境維持には、エネルギーの使用節減はもとより、今まで身近にあり使われることのなかった、太陽光、風力、バイオマス、雪氷冷熱、水力などの再生可能な新エネルギーを代替として考える時期が到来している。世界や日本の動向を考察しながら、新エネルギーを中心にエネルギー生産技術の実態を評価する。特に国内の農村地域では、豊富なバイオマス資源を最大限に活用し、太陽光、風力、水力と共に地域で生産できるエネルギーを利用し最大限自給する「地産地消」を基本に、地域内でエネルギーの持続的利用が可能なのか、北海道のある町をモデルに、調査した結果、エネルギーの自給が可能なのかを考える。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1、世界のエネルギー動向</li><li>2、日本のエネルギー動向</li><li>3、調査地の社会経済条件（人口、気象状況）</li><li>4、調査地のエネルギー消費状況</li><li>5、新エネルギーの賦存把握</li><li>6、新エネルギーの導入可能性評価</li></ol>	

## 質疑・応答

議事録担当者：飯塚聖司

池田：発表を聞く中では、対象の町はかなり特殊な所なようだが、なぜこの町を調査対象に選んだのか。2点目として、目標としてはエネルギーの需給を地域だけで循環させたいということか。施設などは石油がないと整えられないのではないか。

松井：自分の地域では農畜産業が盛んで、バイオマスで満足する。対象の町は自分の地域では作っていない米・野菜類を作っており、私がやりたい研究に適していた。また、地縁があるため調査しやすかった。

エネルギーの需給についてだが、設備機器はどうしても石油を使う。しかしその維持には石油はいらないので、ランニングコストとしてはほとんど石油を使わない。ただし電力は現在北海道では水力・火力・原子力で3分の1ずつ程度になっており、石油を使用していることになる。完全な循環は現状では無理である。技術等の進歩により可能性はある。

木谷：どういった切り口で研究をするのかが不安である。

例えば、その地域だから合うエネルギーはなぜ適しているといえるのかを題材としてはどうか。または、どうして今の水準の新エネルギーを生産しなければならないのか・エネルギーを使わない工夫という方向もありうるのでは、といった切り口ではどうか。

松井：発表での最後の表で、対象の町でつかえるエネルギーを評価している。

省エネの方向については、現在国策として国民の生活水準を保つということでやっている。そして農村ではバスなども少ないため、現行の生活を維持するにはCO<sub>2</sub>排出の少ない新エネルギーを選ぶということが考えの基本になっている。

木谷：例えば、施設の場所を変えて交通の無駄を省くなど、無理のない改善はできないのか。

松井：北海道の地域性からして地域農村を一カ所に集めるとするのは難しい、まして農村集落の破壊にもつながるばかりか、家畜の管理、農産物生産に「通い作」をすることとなりエネルギーの増加になる。

伊藤：最後の表の評価の理屈や、それがまとまっているかどうかといったことを知りたかった。

松井：全て個表をつくって検討している。今回は時間の都合で報告できなかった。

澁谷：先ほどの質問では、田舎では生活を変えられないと答えていたが、どういったインセンティブを与えれば意識や行動様式を変えられるかという研究はできないか。

松井：今回の報告では、新エネルギーである程度は今までの生活を補填できることを示した。

大鎌：新エネルギーに変えることでどれほどコストは高くなるのか。

松井：新エネ各種のトータルでおおよそ2倍ほどになる。